

二〇一四年度 入学試験問題

法学部A方式II日程・国際文化学部A方式・キャリアデザイン学部A方式

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。



○でかこまないこと。

二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

仕事柄、現代の若者たちのコミュニケーション問題について、たくさんのインタビュアーを受ける。マスコミは当然、「いまどきの若者のコミュニケーション能力は危機に瀕している」とか、「子どもたちのコミュニケーション能力が急速に低下している」といったセンセーショナルな文言を並べたがる。しかし、実際には、多くの言語学者、社会学者に聞いても、彼らが良心的な研究者であればあるほど、そういった学問的な統計は出してこない。

もちろん「近頃の若者は、コミュニケーション能力が低下していると思いますか？」といった類の、印象だけを聞くアンケート調査なら、「低下」「著しく低下」といった回答が多く出てくるだろうが、しかしそれを根拠づける学問的統計はカブン(註)にして聞いたことがない。

では、いったい、何が問題になっているのだろうか。私は、現今の「コミュニケーション問題」は、大きく二つのポイントから見ていくべきだと考えている。一つは「コミュニケーション問題の顕在化」^①という視点。もう一つは、「コミュニケーション能力の多様化」^②という視点。

若者全体のコミュニケーション能力は、どちらかと言えば向上している。「近頃の若者は……」¹としたり顔で言うオヤジ評論家たちには、「でも、あなたたちより、いまの子たちの方がダンスはうまいですよ」と言っただけで、いつも私は思う。人間の気持ちを表現するのに、言葉ではなく、たとえばダンスをもつて最高の表現とする文化体系であれば(いや、実際に、そういう国はいくらでもあるだろう)、日本の中高年の男性は、もつともコミュニケーション能力の低い劣った部族ということになるだろう。リズム感や音感、いまの子どもたちの方が明らかに発達しているし、ファッションのセンスもいい。異文化コミュニケーションの経験値も高い。けっしていまの若者たちは、表現力もコミュニケーション能力も低下していない。

事態は、実は、逆なのではないか。全体のコミュニケーション能力が上がっているからこそ、見えてくる問題があるのだと私は考えている。それを私は、「コミュニケーション問題の顕在化」¹と呼んできた。さほど難しい話ではない。どんなに若者の

コミュニケーション能力が向上したとしても、やはり一定数、口べたな人はいるということだ。これらの人びとは、かつては、旋盤工やオフセット印刷といった高度な技術を身につけ、文字通り「手に職をつける」ことによって生涯を保証されていた。しかし、いまや日本の製造業はじり貧の状態で、こういった職人の卵たちの就職が極めて厳しい状態になってきている。現在は、多くの工業高校で（工業高校だからこそ）、就職の事前指導に力を入れ面接の練習などを入念に行っている。

しかし、つい十数年前までは、「無口な職人」とは、プラスのイメージではなかったか。それがいつの間にか、無口では就職できない世知辛い世の中になってしまった。いままでは問題にならなかったレベルの生徒が問題になる。これが「コミュニケーション問題の顕在化」だ。

あるいは、コミュニケーション教育に関する私の講習会に来ていた現役の先生からは、こんな質問を受けたこともある。

「少し誤解を受けやすい表現になってしまいましたが、たとえば自閉症の子どもなら、周囲もそのように接しますし、教員も、できる限りのコミュニケーション能力をつけてあげたいと努力します。でも一方で、必ず、クラスに一人か二人、無口な子、おとなしい子がいます。こういった子は、学力が極端に劣るわけでもないし、問題行動があるわけでもない。いままでは、いわば見過ごされてきた層です。そんな子どもたちにも、小学校からコミュニケーション教育を行った方がいいでしょうか？ たしかに、将来、就職とかは、不利になりそうだと思うのですが……」

これは悩ましい問題だ。ただ、たとえばこう考えてはどうだろう。世間でコミュニケーション能力と呼ばれるものの大半は、スキルやマナーの問題と捉えて解決できる。だとすればそれは、教育可能な事柄となる。そう考えていけば、「理科の苦手な子」「音楽の苦手な子」と同じレベルで、「コミュニケーションの苦手な子」という捉え方もできるはずだ。そして「苦手科目の克服」ということなら、どんな子どもでも、あるいはどんな教師でも、普通に取り組んでいる課題であって、それほど深刻に考える必要はない。日本では、コミュニケーション能力を先天的で決定的な個人の資質、あるいは本人の努力など人格に関わる深刻なものと捉える傾向があり、それが問題を無用に複雑化していると私は感じている。

理科の授業が多少苦手だからといって、その子の人格に問題があるとは誰も思わない。音楽が多少苦手な子でも、きちんと

した指導を受ければカステネットは叩けるようになるし、縦笛も吹けるようになるだろう。誰もがモーツァルトのピアノソナタを弾ける必要はなく、できれば中学卒業までに縦笛ぐらゐは吹けるようになっておこうよ、現代社会では、それくらいの音感やリズム感が必要だからというのが、社会的なコンセンサスであり、義務教育の役割だ。

だとすれば、コミュニケーション教育もまた、その程度のものだと考えられないか。コミュニケーション教育は、ペラペラと口のうまい子どもを作る教育ではない。口べたな子ども、現代社会で生きていくための最低限の能力をつけさせるための教育だ。口べたな子どもが、人格に問題があるわけでもない。だから、そういう子どもは、あと少しだけ、はっきりとものが言えるようにしてあげればいい。コミュニケーション教育に、過度な期待をしてはならない。その程度のものだ。その程度のものであることが重要だ。

ただ、この「コミュニケーション問題の顕在化」は、新卒者の就職などに限ったことではない。製造業に従事する方たちが失職すると再就職が難しいのも、多くの場合、コミュニケーション能力の問題が強く関係している。

いま、日本の労働人口の七割は、第三次産業に就いている。サービス業、人と関わる仕事では、コミュニケーション能力や柔軟性が不可欠だが、製造業に従事してきた方は、この分野が少し「苦手」だ。繰り返し言うが、これは人格の問題などとはまったく関係がない、「音楽が苦手」といった程度の問題だ。しかし現在、「その程度の能力の問題」が、就職の必要条件となつていく以上、転職においても、その事情は同様で、だから製造業を失職した方々は、結局、こういった能力が問われない職業に就職先が限られてしまう。

さらに実は、これは製造業に関わる人びとの問題とも限らなくなってきている。カンヌ国際映画祭で「ある視点」部門**シン**サ員賞を獲得した『トウキョウソナタ』(黒沢清監督)という映画をご覧になったことがあるだろうか。香川照之さん演ずるこの映画の主人公は、一流企業の総務課長だったが、リストラの憂き目にあつてしまう。いったん企業を離れると、再就職しようにも、典型的な日本の企業人間だった彼は自己アピールの一つもできず、面接にことごとく落ちていく。そして結局この主人公は、妻に内緒でビルの清掃業務に就く。警備員でも清掃員でも、もとより職業に**貴賤**はないが、しかし職業選択の幅が極端に

狭くなってしまふことは、個々人にとつては、やはり不幸なことだろう。

③ 産業構造が大きく変わったにもかかわらず、日本の教育制度は工業立国のスタイルのままではないか。上司の言うことを聞いて黙々と働く産業戦士だけを育てるような教育を続けていては、この問題はどこまでいっても解決はしない。製造業関連の失職者の再就職難や派遣法の問題は、根本的には、コミュニケーション教育をホウキしてきた教育行政の失政だと言えるだろう。その失政のつけを、個々人が払わされる謂れはない。

「コミュニケーション能力がないとされる人間が就職できないのは不当な差別だ」といった論調も現実にある。私はこの心情には強く共感するが、教育の現場にいる人間としては、やはりその主張を全面的に受け入れるわけにもいかない。教育の役割は、社会の要請にに応じて、最低限度の生きるためのスキルを子どもたちに身につけさせて世間に送り出すことだからだ。だから私は、市場原理ともどうにか折りあいをつけながら、この「コミュニケーション問題の顕在化」という事象に向かいあつていきたいと思う。たとえばそれは、以下のような方策だ。

先に掲げた「失政」の、もつとも深い犠牲者となつてしまった中高年の製造業従事者に関しては、保護政策として、いわゆる派遣法などを適用せずに、正規雇用を増やしていく。雇用をどうにかして守るために、いままで以上のワークシェアリングを進める必要があるだろう。そして、運悪く失職してしまつた方々には、さらに手厚い雇用保険などの支給策を考えるべきだ。

一方で、いまからでも人生の路線変更が可能な若年層には、小手先の職業訓練ではなく、コミュニケーション教育を徹底して行つていく。ペラペラと喋れるようになる必要はない。きちんと自己紹介ができる。必要に応じて大きな声が出せる。繰り返すが、「その程度のこと」でいいのだ。「その程度のこと」を楽しく学んでいくすべはきつとある。

さて、ではもう一点の「コミュニケーション能力の多様化」とは何だろう。これは、日本人のライフスタイルが多様化したために、子どもたち一人ひとりも、得意とするコミュニケーションの範疇が多様化しているという現象を指す。

たとえば、二〇年ほど前までは一人っ子は圧倒的に少数派だったが、いまではクラスの二、三割を占めている。おじいさん、おばあさんと一緒に暮らしているかどうか。近所に親戚がいるか。商店街で育つたか、団地で育つたか、セキユリティの厳し

いマンションで育ったか。帰国子女も必ずいるだろうし、日本語を母語としない子どもも珍しくはない。そういったライフスタイルの多様化の中で、たとえば、大学に入るまで、親と教員以外の大人と話したことがなかったという学生が一定数、存在するのだ。あるいは、母親以外の年上の異性とほとんど話したことがないという男子学生も意外なほどに多い。

いま、^(d)チュウケン大学では、就職に強い学生は二つのタイプしかないと言われている。一つは体育会系の学生、もう一つはアルバイトをたくさん経験してきた学生。要するに、大人(年長者)とのつきあいに慣れている学生ということだ。これもまた、「そんなものは企業に都合のいい人材というだけのことではないか」という批判があることは十分に承知している。私もその批判は正しいと思うが、これが就職活動の現実なのだ。だとすれば、「そんなものは、慣れてしまえばいいではないか」と私は思う。ここで求められているコミュニケーション能力は、せいぜい「慣れ」のレベルであって、これもまた、人格などの問題ではない。そうであるならば、「就職差別だ」「企業の論理のゴリ押しだ」と騒ぐ前に、慣れてしまえばいいではないか。

だから大学でも大学院でも、コミュニケーション教育がどうしても必要になってくる。一人っ子で、両親の寵愛を一身に集め、セキュリティの厳しいマンションで育った中高一貫男子進学校の「恵まれない子どもたち」のためにも。

(平田オリザ『わかりあえないことから』より。文章を一部改変した)

【注】 * 派遣法

正式名称は「労働者派遣事業の適正な運営の確保及び派遣労働者の保護等に関する法律」。

* ワークシェアリング 総量の決まった仕事を多くの人で分かち合うこと。各々の労働時間を短くするのが典型的な方法である。

問一 傍線部①「コミュニケーション問題の顕在化」の説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 日本の中高年の男性のコミュニケーション能力の低さが明らかになったために、若者のコミュニケーション能力の高さが目立つようになったということ。

イ 教師たちがコミュニケーション能力に敏感になったために、クラスの無口でおとなしい生徒のコミュニケーション能力の低さを見過ごさずに検知できるようになったということ。

ウ 社会全体のコミュニケーション能力が上がったために、今まで問題にならなかった程度のコミュニケーション能力の低さまで問題とされるようになったということ。

エ コミュニケーション能力が低いとされる人間が就職しにくいという状況が深刻化したために、それを不当な差別だと指摘する声教育現場でよく聞かれるようになったということ。

オ 職人の卵たちが工業高校で適切な就職指導を受けられないために、面接でコミュニケーション能力を発揮できないというケースがよく見られるようになったということ。

問二 傍線部②「コミュニケーション能力の多様化」とあるが、その実態の説明として本文中で述べられていないものを一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 子どもの生活環境がさまざまになったことが、コミュニケーション教育が必要になった理由の一つである。

イ 一人っ子のコミュニケーション能力は、そうでない子のコミュニケーション能力より低い。

ウ 体育会系の学生やアルバイトをたくさん経験してきた学生は、年長者とのコミュニケーションに慣れている。

エ 企業が採用において重要視する要素は年長者とのコミュニケーション能力である。

オ 大学に入ってはじめて親や教員ではない年長者と話したという学生もいる。

問三 傍線部③「産業構造が大きく変わったにもかかわらず、日本の教育制度は工業立国のスタイルのままではないか」とあるが、その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 典型的な企業人間だった人たちは再就職の際に必要なコミュニケーション能力に欠けているにもかかわらず、それを補う教育制度がいまだに整っていないということ。

イ 製造業から第三次産業へと産業の中心が変わっているにもかかわらず、日本の教育制度では手先の器用な製造業従事者の養成が重視され続けているということ。

ウ 従来の教育制度がコミュニケーション能力の低い中高年の男性を生み出してきたにもかかわらず、それが維持されているために若者のコミュニケーション能力が伸びないということ。

エ 労働人口の七割がコミュニケーション能力を必要とする第三次産業に就いているにもかかわらず、日本の教育制度ではコミュニケーション教育がいまだに重視されていないということ。

オ 製造業関連の失職者の再就職難は教育行政の失政だと考えられるにもかかわらず、個人のレベルではその点がまだよく認識されていないということ。

問四 波線部「その程度のもんだ。その程度のものであることが重要だ」とあるが、筆者がそのように念を押しているのはなぜか。その理由をつぎの形式にしたがって二十五字以上三十五字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

コミュニケーション能力は一般的に、

--

傾向があるから。

問五 つぎのア～オの各文について、本文の内容に合致するものにはAを、合致しないものにはBを解答欄にそれぞれマークせよ。

- ア 若者のコミュニケーション能力が低下していると指摘する言語学者や社会学者が提示する統計は信用できない。
イ 若者全体のコミュニケーション能力が上昇するにつれて口べたな人の数は減少してきている。
ウ コミュニケーション能力の低さが再就職の際に職業選択の幅を狭めてしまうのは、製造業従事者の場合だけではない。
エ 製造業従事者のコミュニケーション能力を向上させ、彼らの再就職を容易にする政策がとられるべきだ。
オ ライフスタイルが多様化するとともに、年長者とのコミュニケーションに慣れていない若者が一定数生じている。

問六 二重傍線部1～4の漢字の読みとして正しいものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|--------|---|-------|---|-------|---|-------|---|-------|
| 1 | 顕在化 | ア | しょうざいか | イ | けんざいか | ウ | しつざいか | エ | けいざいか | オ | せんざいか |
| 2 | 貴賤 | ア | きさん | イ | きざい | ウ | きせん | エ | きたん | オ | きそん |
| 3 | 範疇 | ア | はんじゅ | イ | はんそう | ウ | はんちゅう | エ | はんちよう | オ | はんと |
| 4 | 寵愛 | ア | ろうあい | イ | ちようあい | ウ | りゅうあい | エ | しゅうあい | オ | りようあい |

問七 二重傍線部(a)～(d)を漢字に直して解答欄に記せ。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

柳田国男の民俗学が日本人の祖霊信仰を明らかにする目的をもって推進されたとして、その代表例を『先祖の話』と『海上の道』の二つの書物に求めることは今は常識とさえなっている。前者は敗戦の前夜にあって、民族的危機の最中に執筆されたものであり、後者は柳田が自己の生涯を間もなく閉じることを自覚して発表したという点において、ともに学術的遺言と称せられていることに異論はない。しかしこの「遺言」に微妙な差異のあることは誰しも気付いている。『先祖の話』は純粹な民俗学的立場に貫かれている。それに反して『海上の道』が民俗学の埒うちをさほど意識しないているのは興味深い。柳田は自分の魂の還りゆくべき所を民族の渡来の源流とみられる南方の島々に重ね合わせている。私の指摘するまでもなく、後者には一国民俗学の埒内にとどまろうとする姿勢は前者よりも稀薄である。この両者の間には敗戦という **あ** 曾有の民族的体験が介在している。『先祖の話』のときまでは健在であった「家」永続の願望は戦後の諸改革によってとどめを刺された。私は『先祖の話』を割引して評価せよというのではけつしてない。しかしその柳田の書物といえども、歴史的制約を免かれないという **い** の悲しみは拭えない。だが、そのことがそのまま『海上の道』の成功につながると私はいおうとするものではない。柳田の壮大な意図にも拘かわらず、『海上の道』の欠陥は容易に指摘できる。

ここにおいて私の前には『山宮考』が浮やまみやびあがる。『山宮考』は『先祖の話』と共通の部分を含みながら、一方においては『海上の道』とつながる。すなわち、それは戦後の民俗学の動向である他の隣接の学問との接触を示唆している。『海上の道』が民俗学と民族学との架橋を暗示しているのにたいして、『山宮考』は民俗学と考古学の対話を可能にしている。そうした意味でも『山宮考』は重要な著作である。だが日本人の祖霊信仰に肉薄した三部作『先祖の話』『山宮考』『海上の道』のうち『山宮考』だけがあまり顧みられていない。そのことを怪訝けげんに思っている私にしたところで、『山宮考』に着目するようになったのは、日本各地を訪れて民俗調査を試みるようになってからのことである。私は神社の境内に古墳の存する例を見聞することが多い。死穢しえを忌む神社と古墳との間にながしかの関連があるとすれば、古代において祭場と葬所とは一致していたのではないかという想

念が去来するようになったとき、柳田の『山宮考』は新しい姿で私の前に現われた。

『山宮考』はどういう動機で書かれたのだろうか。柳田はその直前に『先祖の話』という傑作を書き終えていた。さらに屋上^うを架する必要があるだろうか。『山宮考』は神道家の忌避にあうことを憚^{はば}ってか、その表現には柳田一流のほかしの手法が駆使されている。しかし『山宮考』に付せられた彼自身の解説の中で次のように述べているのを見ると、彼の意図は推測できる。

中世以降の神道説が、仮に誤りであるにもせよ、斯くまでに本来の筋路を遠ざかつてしまふやうになつた事情といふものも明らかにしなければならぬ。非常に大きな仕事だが、それをまとめ上げる責任も私には有る。

日本の神道にまつわりついてきた歴史的付加物を慎重に剝離して、それを原初の姿に還元することは、柳田ほどの碩学^{せきがく}にしてはじめて可能な業であつた。しかし「それをまとめ上げる責任も私には有る」と柳田がいうとき、当然の自負という以上に、そこにはな^③にがしかの反省がこめられていたと私はみる。

柳田は「新国学談」第一冊として『祭日考』を昭和二十一年十二月に、「新国学談」第二冊として『山宮考』を二十二年六月に、「新国学談」第三冊として『氏神と氏子』を二十二年十一月に、というふう^②にそれこそ息つく暇もないほど矢つぎ早に刊行した。敗戦前の著述である『先祖の話』が刊行されたのは二十一年四月であるから、それからしても「新国学談」の三冊はわずか半年の間隔をおいて次々に上梓^{じょうし}されたことになる。

戦後の混乱期にこのような精力が七十を超えた老翁から奔^はり出たことに驚嘆せずにはいられないが、『先祖の話』が戦争中の危機感から発せられたものであつたのに比して、戦後の危機をいちはやく感じたことが、これら「新国学談」の執筆動機ではなかつたか。「新国学談」の内容がすべて神社や神道にかかわっていることからして、柳田は新国学と銘打ってあたらしい神道の解釈を目指したのではないか。

人がなんといおうとも日本の敗戦とは国家神道の敗北にはかならぬことを、柳田や折口は知悉^{ちしつ}していた。しかも進歩的知識人の国家神道にたいする無効宣言とはまた違った道を彼らは歩こうとしていた。それは何故か。柳田や折口の民俗学は国家神道と鋭く対立するものであつたが、民俗学という学問の性質上、国家神道とあいわたる領域でその仕事^{*}が積み重ねられてきた。

そうした表面上のまぎらわしさのゆえに、民俗学は戦時中の弾圧をまぬかれたが、重苦しい自己抑制を捨てることはできなかつた。そこで敗戦の打撃が国家神道を壊滅させたとき、柳田は民俗学の立場からする神道の問題にあらためて取組み直さねばならぬとおもつたのであろう。それが柳田の「責任」の意味であると私は考へている。

『山宮考』から私の受取る最大の教訓とは、素朴でもっとも古型をのこす祭と死者とはつながっているという事実を知らされたことである。^④山宮祭が祖先を葬った場所でおこなわれ、氏神祭もまたそれと多くの共通した面を有するという事実は、死穢をもっとも忌避する神道にたいする真向うからの挑戦である。柳田が戦争の破局を目前に控えて、新しい国学の樹立に熱中し、とくに山宮祭と氏神祭との関連の解明に情熱を傾けた理由もここに存すると私は考へる。

神道と国家主義の癒着、それは国家大に拡大し、疎外された神道の謂でもあるが、その誤つた道から引き返すにはどうしたらよいか。それは大地を媒介とした祖霊とその末裔との間の交流という信仰の原初にかえるほかはない。しかし国家神道に眼を曇らされた輩に対してそれを証明するものがなくてはならぬ。その意味で山宮祭と葬地との関連、また山宮祭と氏神祭のつながりの発見は彼にとつてきわめて重要なことにちがひなかつた。

だがそれはとつぜん彼に訪れたのだろうか。私にはそうはおもえない。柳田は祭場と葬所とが一致する例、そうでなくても至つて近い距離に両者が並び存在する例について熟知していた。このことは『山宮考』には一切触れていない。しかし、若狭大島のニソの杜、対馬のヤボサや天道地、薩摩のモイドン、そして南島のウタキなどがそれらしきものであることに、彼が気づいていないはずはなかつた。

これらはけつして一般的な神と人とを媒介する聖地ではない。祖霊神とその末裔との間の濃密な交流の場所である。それらに共通する点はこれらの聖地が樹木をもつてその標とするだけで、かくべつに建物らしい建物をもっていないということである。あるとしても後で置かれた小祠を見出すにすぎない。次にその聖地にたいする強い畏怖感があるということである。そこに生えた樹木の枝を折つたり、その聖地に足を踏み入れたりするとあたりがあるると地元の者は信じている。そして最も重要なことは、それらの聖地が葬所であるという断定はしがたいけれども、すくなくとも人骨を埋葬した場所と関係がある事実を否

定できないということである。

以上の特色をまとめ合せてみると、むしろ葬所のあとと考えたほうが理解しやすい。なぜなら、昔、祖先を葬った森の蔭を祭場とするとき、死者のたたりをおそれて、そこに足を踏み入れるなどか樹木を折るなどという禁忌が人びとの間に生まれるのは自然だからである。

これらの聖地には鳥居や社殿のような建物はなく、こんもりと茂った樹木が目印である。そこは自然の森のようであって、人間の意志がなにか目立たぬように加えられている。そこに祖先と末裔とをつなぐ祭祀の場が設けられているというのは、人間と自然、生者と死者とが一体になっているという充実感を与える。

ひるがえって神社の中でしばしば襲われるあのどうしようもない空虚感はどこに由来するものであろうか。私の考えでは、触穢へのつよい警戒心、とくに死穢からできるだけ遠ざかろうとする清浄感が空虚感を生み出すのである。死者との連帯をもたないで宗教が成立するはずもないことは自明の理であるにもかかわらず、神社神道は死者の管理を仏教にゆだねた。その結果、死者の眠る大地との **え** 帯、大地を媒介にした生者と死者との連帯意識から生まれてくる充実感は喪失した。

死者の眠る土地との連帯意識をもたない宗教が空虚なものにおち入るのはとうぜんである。祖霊を祀ることが氏神祭であるとするれば、そこに死者の面影が立ちまじることはあたりまえのはずなのに、死臭にたいする極度の潔癖が日本の神社神道を支配した。それは神道の自己疎外ともいうべき道であり、その道をすすむことによって、神道は国家主義と癒着し、侵略主義の先駆となり、理論的支柱となった。

だが祭と葬とはそのようにつごうよく分離できるものであろうかというのが『山宮考』の発した痛切な問いである。仮りに分離しえたとしても、大地との **え** 帯の根を絶ち、死者から遠ざかることによって生じた疎外感が、神道の破産を招いたのではないか、と柳田のつぶやく声が私に聞える。

(谷川健二『日本人の魂のゆくえ』より。文章を一部省略した)

【注】 * 死穢 人間や動物の死を不浄と見なし、それとの接触を忌む古代日本以来の宗教的観念のこと。

* 折口 民俗学者で、日本古代文学の研究でも知られた折口信夫(二八八七〜一九五三)。

問一 空欄 あ え にあてはまる漢字として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

あ <input type="checkbox"/> 曾有	ア有	イ未	ウ已	エ無	オ不
い <input type="checkbox"/> 一	ア抹	イ端	ウ縷	エ隻	オ介
う <input type="checkbox"/> 屋上	ア台	イ楼	ウ閣	エ庭	オ屋
え <input type="checkbox"/> 帯	ア一	イ付	ウ紐	エ横	オ共

問二 傍線部①「後者には一国民俗学の埒内にとどまろうとする姿勢は前者よりも稀薄である」とあるが、それはどのようなことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア 『海上の道』には、外国の諸学問と日本の民俗学との接続を試みようとする態度がみられるということ。

イ 『海上の道』には、敗戦という民族的体験を経て民俗学から離脱しようとする態度がみられるということ。

ウ 『海上の道』には、民俗学を南島の民族についての学問と結びつけようとする態度がみられるということ。

エ 『海上の道』には、『先祖の話』でつきあつた民俗学の限界を克服しようという態度がみられるということ。

オ 『海上の道』には、民俗学の枠組みを民族の渡来の源流へと拡大しようとする態度がみられるということ。

問三 傍線部②「神道家の忌避にあうことを憚って」とあるが、それはなぜだと考えられるか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 柳田は、『山宮考』で信仰の原初のあり方を明らかにすることは当時の神道家の立場を脅かすと分かっていたから。
- イ 柳田は、従来の神道説を直すような大きな仕事となる『山宮考』が神道家の羨望の的となることを予感していたから。
- ウ 柳田は、『山宮考』に前の著述と論旨の重複があることを神道家にあげつらわれるのではないかと恐れていたから。
- エ 柳田は、『山宮考』で神道への歴史的付加物を取り除くことは神道家の仕事を先取りすることになると知っていたから。
- オ 柳田は、『山宮考』において民俗学の枠を超えて神道説にふみ込むのは僭越せんごつだと神道家に非難されると察していたから。

問四 傍線部③「なにがしかの反省」とあるが、それはどのような感情か。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 敗戦に至るまで国家神道の改革に積極的に着手してこなかったことに対する省察
- イ 敗戦を迎えるまで国家神道の問題に気付かず批判してこなかったことへの悔悟
- ウ 民俗学と領域が近く、親和性も高い国家神道が敗北に至ったことに対する無念さ
- エ 敗戦まで民俗学と国家神道の対立にあえて触れないようにしてきたことへの悔恨
- オ 民俗学と対立する国家神道への挑戦が成功しないまま敗戦に至ったことへの後悔

問五 傍線部④「山宮祭」とそれが行われる場についての説明として誤っているものをつぎの中からすべて選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 人々が先祖を埋葬したと思しい樹木の陰などでその霊を祭ること、氏神祭と共通性をもつ。
- イ 大きな建造物はなく、人の手が一切加えられていない自然そのままの樹木が標となっている。
- ウ その場所に対して地元の人々がおそれを抱いていて、何らかの決まりごとが共有されている。
- エ 神として崇められるようになった死者に対して、広く後世の国民が祈りを捧げる場所である。
- オ 子孫が自らの先祖の霊を祭ることによって、それと交流をもつおそろしくも聖なる森である。

問六 傍線部⑤「神社の中でしばしば襲われるあのどうしようもない空虚感はどこに由来するものであろうか」とあるが、筆者が考えるその答えとして最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 神道が死の穢れを警戒するあまり、宗教に期待されるような安らぎを人々に与えられなくなったこと。
- イ 神道が死者の管理を仏教にゆだねたことによって、葬送儀礼における実質的な権威を失ってしまったこと。
- ウ 神社の社殿が、死の穢れを避けるために死者の埋葬される大地と直に接触しない構造になっていること。
- エ 神社が極端に清浄さを追求することによって、人間らしい独特の生活感が失われてしまったこと。
- オ 神道が、祭祀によって祖霊とつながることの生む充足感を人々に与える役割を手放してしまったこと。

問七 柳田が『山宮考』で明らかにしようとしたことは何か。つぎの形式に従って、二十五字以上三十五字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、読点や記号も一字と数える。

柳田は、

を明らかにしようとした。

〔三〕 つぎの文章は『十訓抄』の一節で、醍醐寺で行われた観桜会をめぐるエピソードを記したものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

醍醐の桜会に、童舞わらわまひおもしろき年ありけり。源運といふ僧、その時、少将の公とて、見目みめもすぐれてよく、舞もかたへ①にすぐれて見えけるを、宇治の宗順阿闍梨あざり見て、思ひあまりけるに（a）や、あくる日、少将の公のもとへいひやりける、

I き（I）のふ見（*）すがたの池に袖ぬれてしほりか（b）ねぬといか（b）でしらせん
少将の公、返事、

II あまた見（*）すがたの池の影なればたれゆゑしほる袂なるらん
といへりける、時にとりて、めづらしかりけり。②

中院僧正（*）、見物し給ひけるが、これを聞きて、いみじと思ひしめて、同じ入道右府に（*）対面のついでに、このことを語り出で給ひて、③「やさしくこそおほえ侍りしか」とありければ、入道殿、「歌はおほえさせ給はん」など、のたまひけるを、「そればかりは、などか」とて、「少将の公がり、宗順阿闍梨、つかはし侍るに、

き（*）のふ見（*）しにこそ袖はぬれしか

とよめるに、少将の公、

（*）荒涼にこそぬれけれ

と、返して侍りし」と語り給ひけるに、たへがたく、をかしくおほえけれど、さばかりの生き仏の、ねんごろにいひ出で給ひけることなれば、忍び給ひけるとなん。ずちなくおほしけり。④

和歌の道は、顕密（*）、知法の碩徳（せたく）にはよらざりけりと、なかなか、いとたふとし。同じ僧正なれども、むかしの遍照、今の覚忠などには似給はざりけり。（f）

【注】

* 童舞 元服前の少年が演ずる舞楽。

* 少将の公 源運の少年時代の呼び名。

* すがたの池 現在の奈良県にある菅田神社近くの池。

* 中院僧正 定遍(一一三三～一一八五)のこと。平安末期の真言僧。

* 同じ 同じ中院の同族、の意。

* 入道右府 源雅定(一〇九四～一一六二)のこと。

* 荒涼に すさまじい状態。

* 顕密、知法の碩徳 仏教の教義に深く通じていること。

問一 傍線部①「かたへに」②「めづらしかりけり」③「やさしくこそおぼえ侍りしか」の本文における意味として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

① 「かたへに」

ア 観客たちに イ 容貌以上に ウ ほかの舞人より エ 人並みに オ 個性的で

② 「めづらしかりけり」

ア 奇妙なようすであった イ 賞賛すべきやりとりであった ウ 思った以上の出来栄であった

エ 意外なできごとであった オ あきれたできごとであった

③ 「やさしくこそおぼえ侍りしか」

ア 簡単に応じたように思われました イ 心優しい方だと思われました

ウ 打ち解けた気分になりました エ 優雅なことに思われました

オ たいそう気の毒なことに思われました

問一 傍線部(a)「に」(b)「ぬ」(c)「させ」の文法的説明として最も適切なものをそれぞれつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 完了の助動詞
イ 断定の助動詞
ウ 打消の助動詞
エ 尊敬の助動詞
オ 使役の助動詞
カ 格助詞

問三 傍線部(d)「のたまひ」(e)「給ひ」(f)「給は」は誰に対する敬意を表しているか。最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 源運
イ 宗順阿闍梨
ウ 中院僧正
エ 入道右府
オ 昔の遍照、今の覚忠

問四 I・IIの和歌についてつぎの問いに答えよ。

(1) I「きのふ見しすがたの池に袖ぬれてしほりかぬぬといかでしらせん」の和歌に用いられている修辞法として適切なものを、つぎの中から二つを選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 枕詞
イ 掛詞
ウ 倒置
エ 縁語
オ 序詞

(2) II「あまた見しすがたの池の影なればたれゆゑしほる袂なるらん」の解釈として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

- ア 大勢の人が見ている前で舞ったので、思わず感動の涙に袂を絞ったことと思います
イ 優雅に舞ったはずなのに、どうしてそのような私の姿を見て悲しみの涙に袂を絞ったのかわかりません
ウ 何度も見た舞姿なので、誰も感動の涙に袂を絞ることなどはないと思います
エ 慣れ親しんだ舞姿でしたら、あらためて喜びの涙に袖の袂を絞ることはなかったと思います
オ たくさんの方の舞姿を見たのですから、いったいどなたの姿に恋い焦がれて涙の袂を絞っているのかわかりません

問五 傍線部④「たへがたく、をかしくおぼえけれ」についてつぎの問いに答えよ。

(1) 誰が、誰に対して「たへがたく、をかしく」思ったのか。最も適切なものをつぎの中から選び、「誰が」に相当するものについては解答欄Xの、「誰に対して」に相当するものについては解答欄Yの記号をそれぞれマークせよ。

ア 源運

イ 宗順阿闍梨

ウ 中院僧正

エ 入道右府

オ 作者

(2) 「たへがたく、をかしく」思ったのはなぜか。その理由を、つぎの形式にしたがって、三十五字以内で説明せよ。ただし、解答文の中に登場人物を指す言葉は使ってはならない。なお、読点や記号も一字と数える。

から。

問六 『十訓抄』は鎌倉時代に成立した作品である。つぎの中から、『十訓抄』より後に成立した作品をすべて選び、その記号をマークせよ。

ア 風姿花伝

イ 今昔物語集

ウ 源氏物語

エ 雨月物語

オ 日本霊異記

カ 大和物語